



弘法大師（空海） 篇

真言宗の開祖

空海（くわかい）（774～835）は平安時代初期の僧で、真言宗の開祖です。

宝亀5年に讃岐国多度郡（現在の香川県善通寺市）で生まれ、18歳のとき、高級官僚養成のための大学に入りますが、まもなく退学して仏教的な山林修行をはじめ、四国各地や大和の金峯山などの聖地を巡り歩き、修行に励みました。

その後、延暦23（804）年には遣唐使の一員として唐（現在の中国）に渡り、梵語やインドの学問、密教等を学び、大同元（806）年に帰国しました。その時に数多くの密教の典籍、仏像、法典、曼荼羅をはじめ、唐の文物をあわせて日本に持ち帰り、真言宗の開祖への道を歩みはじめました。高野山を国家のために、また修行者の道場とするために開き、天台宗の比叡山とともに平安時代初期の山岳仏教の拠点となりました。また、京都の東寺（教王護国寺）を京都における真言密教の根本道場に定め、後進の育成にも努めました。

延喜21（921）年には、醍醐天皇から「弘法大師」の諡号（生前の業績を誉め称えて贈る名）が贈られ、「お大師さん」として今も人々から親しまれています。四国の山岳修行時代に遍歴した霊跡は、「四国八十八箇所」に代表されるような霊場として残り、霊場巡りは人々の篤い信仰を集めています。

弘法大師に関係する伝説は、全国各地にあります。ここ宇陀にもいくつか伝えられています。次回、ご紹介することとしましょう。

